

## 瀬戸内オーシャンズXの取組み ～連載第3回～



瀬戸内オーシャンズX 推進協議会事務局  
松浦 正樹

### 1. はじめに

瀬戸内オーシャンズX(日本財団と瀬戸内4県(岡山県、広島県、香川県、愛媛県)による海洋ごみ対策プロジェクト)は、2025年までに瀬戸内海への新たなごみの流入を70%減らし、回収量を10%以上増やすことを目標とし、瀬戸内海の海洋ごみの全体量を減少傾向に転じて問題解決へ繋げていくことを目指しています。集中連載として2022.No.83から瀬戸内オーシャンズXの取組みを紹介しています。今回は、日本財団・瀬戸内オーシャンズX瀬戸内海洋ごみ削減行動促進支援基金「戦略的な海洋ごみの削減・地域循環型社会形成助成プログラム」についてご紹介します。

### 2. 基金の概要

今回の基金については、以下のような背景・現状も踏まえ、活動を強力に支援し目標を達成するため、日本財団から5億円の支援を受け、3か年計画の「瀬戸内海洋ごみ削減行動促進・支援基金」を2022年5月に設置し、助成プログラムを開始しました。

#### <背景・現状>

- 海洋ごみの約8割は陸域で発生し、ごみが川や用水路などを通じて海に流出する。一度海へ流出したごみの回収は多大な労力を要するため、陸域でごみを回収することが重要となる。日本財団が実施した大規模川ごみ調査では、瀬戸内4県の人口が集積したエリアの280(総延長1,188km, 流域人口カバー率 60%)の河川でごみが集中して散乱する箇所(ホット・スポット)が1,711箇所確認された。また、プラスチックごみの年間流出量は200トン以上と推計される。台風や草が繁茂する時期など作業に支障がある時期を避け、懸案場所を捉えた効率的な回収活動モデルの実践が重要となる。(本誌2022.No.83も参照)
- 市民ボランティアが清掃活動できているエリアは懸案箇所の10%程度に留まり、質・量ともに十分とは言えない。そのため、市民ボランティアに加え、職業上のスキルや専門知識を発揮して公益的活動に参加する専門性の高いボランティア(プロボノ)と連携した活動モデルの実践が重要となる。
- 一度海に流出し、アクセスが困難な海岸に漂着したごみや、海底に沈んだごみの回収は、漁業者の協力なくしては不可能である。操業時に混獲されたごみと漁獲物を船上で仕分けて陸揚げし、回収、処理をする一連の活動と、継続的に展開できるモデルづくりと実践が重要となる。
- 海洋ごみになり得る発泡スチロールなどプラスチックを多用するあらゆる産業において、発生抑制策が必要とされている。瀬戸内4県または他の地域と結びあわせた循環型社会のモデルを創出し、サプライチェーンを通じて波及させていく取組みが重要となる。

助成の対象となる団体については、本プログラムの趣旨に沿った取り組みを行う日本の団体、企業としており、自治体は除いていますが、その他幅広く対象としています。

対象となる事業の内容については、海ごみの回収か発生抑制・資源循環に資する事業としており、事業費の総額に対する助成金の補助率は、原則として80%としています。

#### <対象事業>

##### (1) 瀬戸内4県における戦略的なごみ回収の推進に関する助成

・川や海での回収活動を通じた地域での担い手の育成・専門的知見・スキル向上。

・ホットスポットを踏まえた効率的なごみ回収活動、またはごみ漂流特性を踏まえた効率的な海岸ごみ回収活動、および、これらの活動に付随する自治体調整、安全管理、地元調整、実施検証、情報発信などの内容を含む事業の計画立案と実施。

・漁業操業時に混獲される海底ごみなどの回収・仕分け作業に貢献する漁業者・漁業協同組合などの支援および、これらの活動に付随する関係者の調整、情報発信などの内容を含む事業の計画立案と実施。

##### (2) 地域循環型社会形成に関する助成

・瀬戸内4県の海洋ごみ削減に貢献しうる発生抑制、資源循環スキームの構築。

※短期(1~2年)で問題解決が見通せる活動を対象とする



写真1 活動イメージ(上4枚は(1)下4枚は(2))

上記の要件で、令和4年度については、【第1期】8月15日(月)~9月5日(月)、【第2期】12月1日(木)~1月13日(金)の2期に分けて募集し、第1期で16件、第2期で20件の申請がありました。そのうち、活動地域や自らの特徴・課題を捉えた活動内容について第三者委員会の意見も伺いながら、第1期で11件、第2期で8件を採択しました。

事業の実施期間を年度で区切っていないことや、瀬戸内の気候として冬季の北西の風による漂着物を狙った回収を目的とした活動などもあり、この記事が目につく頃にはまだ第1期申請の事業の多くは完了していませんが、活動の一例としては、リアス式海岸のため、船でしか行けないようなアクセス困難な海岸が多くあるような愛媛県の佐田岬半島での活動があります。この地域では2つの団体を第1期で採択していますが、その中で「さだみさき海援隊」という団体は、漁師や地域住民が中心メンバーです。坂本龍馬が本家本元の「海援隊」を設立したのが31歳。長崎で清掃活動を行っていた代表が31歳になる年に、坂本龍馬のように日本を変え、漁師が海を助ける、という想いが団体の名前の由来です。瀬戸内オーシャンズXの理念や意義に共感していただき、活動を始め、活動資金が無かった中で、本基金を活用し、四国最西端の地から漁師ならではの定期的な活動を実施しています。

具体的な活動としては、陸から歩いて行ける海岸では、月1～2回の頻度で定期的な海岸清掃を実施し、また、地元漁師をメンバーに有している強みも活かして大量に海洋ごみが漂着している海岸へ船で回収に向かったり、素潜り漁師による海中清掃活動も実施しているほか、公民館等の文化祭なども利用して海洋ごみ問題の普及啓発にも取り組んでいます。その結果、地元公民館や小学校、他所で活動されている清掃団体などと連携した活動のオファーを受けるなど、着実に地元での理解を深めており、瀬戸内オーシャンズ X としても今後の活動の発展に期待しています。

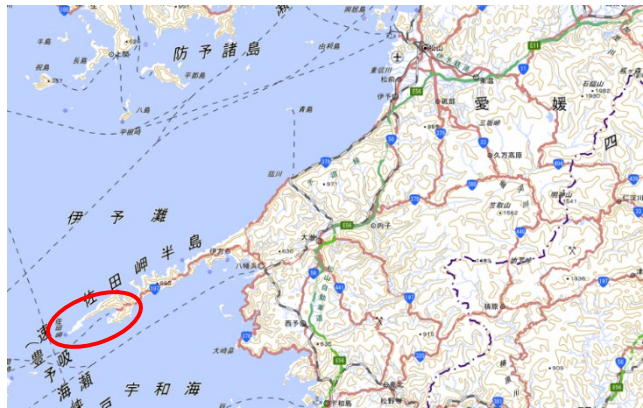


図1 さだみさき海援隊活動エリア(国土地理院地図に図形を追記)



写真2 活動エリア周辺の海底に堆積したペットボトル



写真3 活動エリアの海岸に漂着・散乱した海洋ごみ



写真4 清掃後の集合写真



図2 さだみさき海援隊公式マスコット

令和5年度についても、募集時期は令和4年度での時期と前後する可能性はありますが、2期に分けて募集する予定としています。今年度については、ごみ回収に関する申請がほとんどでしたが、そもそもの海洋ごみの発生抑制に貢献しう活動の方こそ、今後の海洋ごみ対策に重要なところですので循環型社会形成に関する申請もお待ちしております。

瀬戸内海洋ごみ削減行動促進・支援基金HP (<https://fund.setouchi-oceansx.jp/>)



## リモート学習教材を活用した海洋環境教育 ～「うみわかまもる」プロジェクト～

NPO 法人 わかやま環境ネットワーク/一般社団法人 加太・友ヶ島環境戦略研究会  
平井 研

### 1. はじめに

2007年に制定された「海洋基本法」の第28条には「国は、国民が海洋についての理解と関心を深めることができるよう、学校教育及び社会教育における海洋に関する教育の推進、(中略)海洋に関するレクリエーションの普及等のために必要な措置を講ずるものとする」という文言が記載されている。しかしながら、学校教育現場では海洋について学習する機会が少なく、新型コロナウイルスの影響によってその機会はさらに減少していると考えられる。一方、2015年9月の「国連SDGsサミット」をはじめ、2019年6月の「大阪ブルー・オーシャン・ビジョン」など、海洋ごみへの関心は年々高まりつつあり、「海洋ごみ」問題について学び、考え、取り組む必要があると考えられる。そこで、対面での活動が困難な状況下において、動画を中心とした海洋ごみに関するリモート学習教材を制作し、海洋環境教育を実践する「うみわかまもる」プロジェクトが2020年度からスタートした。

### 2. うみわかまもるプロジェクトとは

「うみわかまもる」プロジェクトの中心を担うキャラクターであるウミガメのまもるくんを図-1、プロジェクトの概要を図-2に示す。プロジェクトは大きく分けて2つの柱で進めている。1つ目は、リモート学習教材を活用した海洋環境教育の実践である。2つ目は海岸清掃など対面での活動であり、こちらはリモート学習した子供たちが参加するものである。1つ目のリモート学習教材については、まもるくんが様々な場所を訪れ、海洋ごみ問題の現状を伝え、問題について学習できる内容になっている。リモート学習教材の構成を表-1に示す。教材は1話あたり5～8分ほどの短い動画を制作し、全6話で構成している。第1話は物語の序章、2～3話は家庭ごみの行方、4話は海洋ごみの現状、5話は海洋ごみを活用するアーティスト、6話は今後の取り組みについての呼びかけ、といった構成である。教材の内容については、「ごみが悪い。ごみが生き物を苦しめている。だからごみ拾いをしよう」といったものではなく、例えば5話では、海ごみをごみとは扱わず、宝物としてアート作品を制作するアーティストたちと交流し、ごみとは何なのかを考えるといったストーリーになっており、各話とも、海洋ごみ問題についてより深く考えることができる内容である。

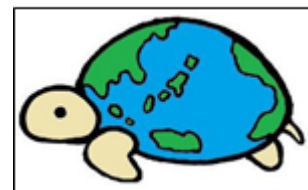


図-1 まもるくん

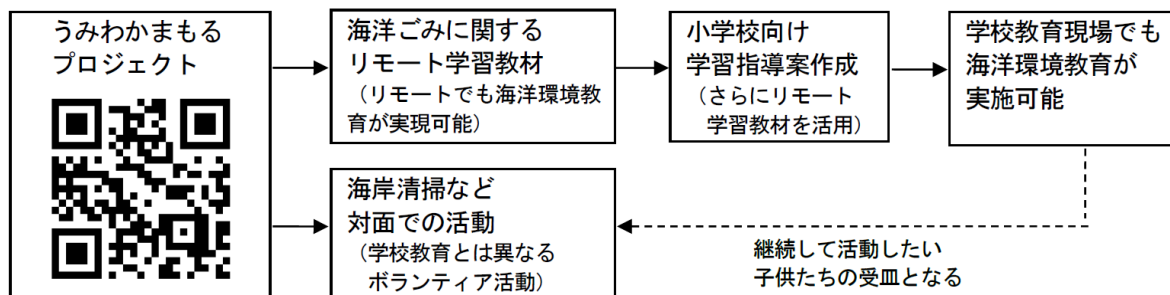


図-2 うみわかまもるプロジェクト概要

表-1 リモート学習教材の構成(学習指導案から抜粋、一部改変)

話数	タイトル	内容
1 話	新たな出会いと旅のはじまり	ウミガメのまもるくんが海ごみ問題について興味を持ち、ごみ問題について調べる旅に出ます。
2 話	ごみはどこへ行く？ -前編-	まもるくんが家庭ごみの行方を追いかけます。ごみが焼却施設でどのように処分されているか調べます。
3 話	ごみはどこへ行く？ -後編-	灰になったごみはさらにどのように処分されるのか？まもるくんがその行方を追いかけます。
4 話	海のごみをみんなの力で	家庭ごみの次はポイ捨てなどによって海に流れ出たごみについて調べます。
5 話	ごみがアートになる？	海岸に漂着したごみをアートに変えてしまう人たちに話を聴きに行きます。
6 話	次はあなたぼくといっしょに	ごみについて学習したまもるくん。海洋ごみ問題をどうすれば解決できるのかを考え、行動していきます。

このリモート学習教材をさらに活用し、小学校での海洋環境教育を実践するために「海洋ごみ問題に関する学習指導案」を作成した(図-3)。本指導案は和歌山大学教育学部附属小学校の教諭に協力いただき、教育現場において使用されている指導案に準じて作成した。つまり学校の先生方が普段使っている指導案の様式に海洋ごみ問題に関する内容を落とし込み、かつリモート学習教材を活用することにより、従来に比べ容易に学校教育現場での海洋環境教育が実施可能となった。この学習指導案とリモート学習教材を活用した小学校での海洋環境教育は、2022年度から実施されており、既に和歌山市内4校、紀の川市内1校の小学校において導入され、現在も和歌山県内外の学校から問い合わせがあり、今後さらに導入校を増やしていく予定である。導入を検討、希望される場合は図-2に示されているQRコードからHPをご確認ください。



図-3 海洋ごみ問題に関する学習指導案

### 3. 今後の展開

本プロジェクトはまだ始まって間もない状況であるが、和歌山市立和歌浦小学校の生徒たちは、リモート学習教材の内容を模した紙芝居を制作し、海岸清掃や各種イベントなど多くの場面で披露するなど、リモート学習がきっかけとなり、子供たちの主体的な活動が見られるようになってきた。また、HP上から登録できる「うみわかまもる隊員」は既に224名を超え、揃いのTシャツを着て海岸清掃などに取り組んでいる。本プロジェクトは子供たちが中心となって海洋ごみ問題に取り組んでいるが、本来、海洋ごみ問題は主に“大人”が取り組むべき問題である。本プロジェクトの子供たちの活動を通して、大人の意識や行動も変わるよう、今後も活動を展開していきたいと考えている。

【「うみわかまもる」プロジェクトは、一般財団法人 和歌山環境保全公社から委託を受け、NPO 法人 わかやま環境ネットワークが実施しているプロジェクトである。】